

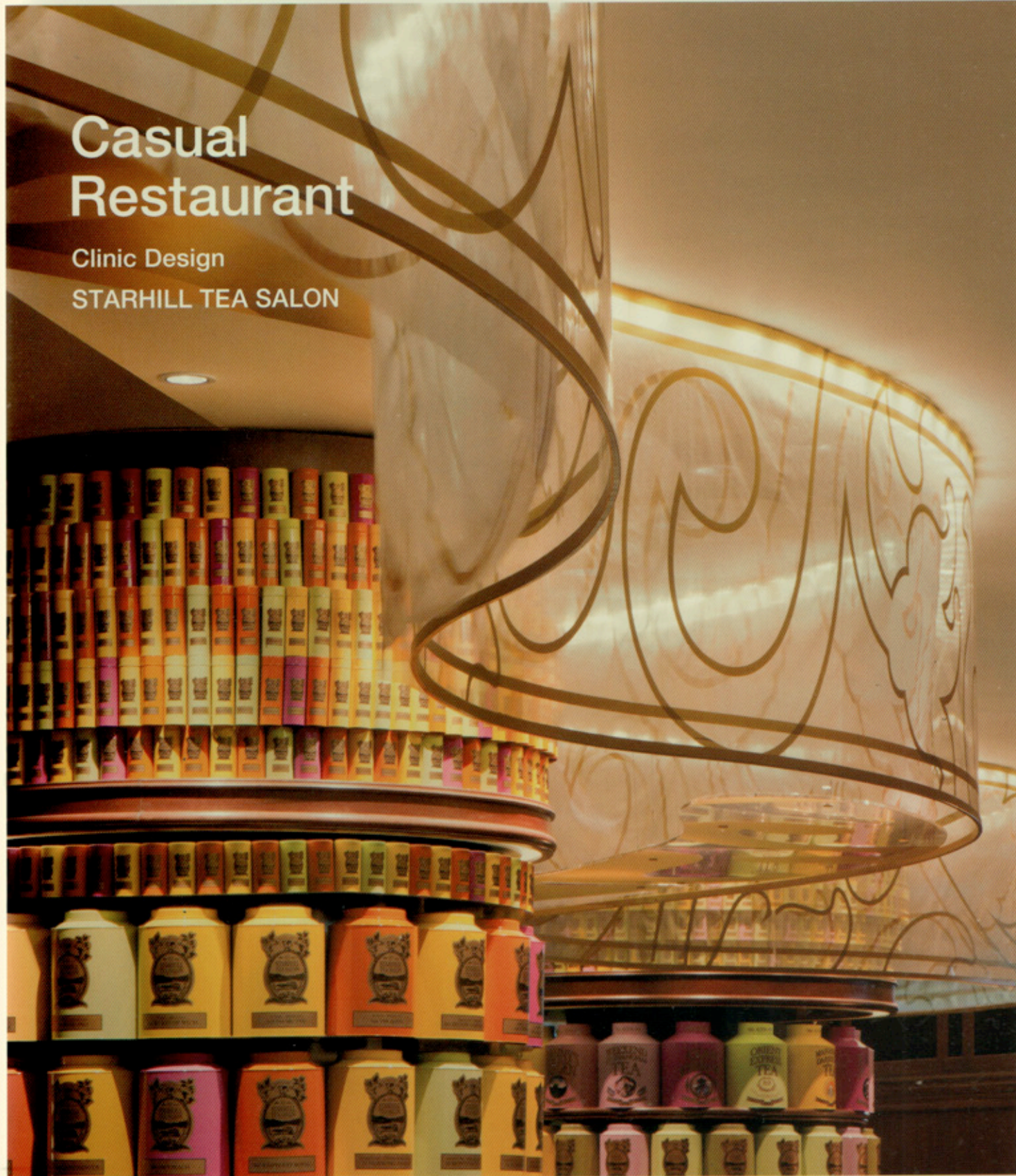
商店建築 4

2012 Vol.57 No.04
SHOTENKENCHIKU
平成24年4月1日発行 毎月1回発行
昭和31年6月12日 第3種郵便物認可
第57巻第4号 通巻712号

カジュアルレストランの平面計画 / クリニック / スターヒルティーサロン

Casual Restaurant

Clinic Design
STARHILL TEA SALON



monthly magazine of store design, interior, commercial architecture

New Definition of Design

Vol.08



Tomás Alonso

トーマス・アロンソ

1974年スペイン生まれ。19歳で米国へ渡って学び、自動車関連の企業などで経験を積んだ後、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート (RCA) で学ぶ。卒業後はピーター・マリゴールドらと OKAY STUDIO を結成。現在、KARIMOKU NEW STANDARD の仕事も進行中

デザインの新定義

最近のコンテンポラリーデザインの空気感を象徴する新世代デザイナーの一人として、またデザイン集団「OKAY STUDIO」の一員として、活躍の場を広げているトーマス・アロンソ。現在までの経験や、デザインシーンについての認識には、グローバルなセンスを前提とするクリエイションの在り方が反映されている。

自分が楽しんで、ものをつくりたい

— ス페인出身でありながら、アメリカで過ごした期間があるのはなぜですか？
人生には予測できないことがあるものです。私はまずアメリカで英語を習い、その後にはスイスでデザインを学ぼうと考えていました。しかし多くのすばらしい出会いがあり、ある会社でジュニアデザイナーとして働き始め、やがてデザインディレクターになって、7年間をアメリカで過ごしたのです。でも次のステップに進むには、ヨーロッパだと思いました。自分のスタジオを持ち、いろいろな企業と異なるプロセスやテーマに基づいてデザインするという、本来のプランを実現するためです。そ

のステップのためにRCAに進むことにしました。

— RCA時代に最も印象的だったことは？
それまでの経験をふまえ、未知のさまざまなアプローチを学ぶことができました。ただ最も大きかったのは、似たビジョンを持つクラスメートに出会い、考えをシェアできたことです。そのような時間を2年間、たっぷりと持ったことで、しっかりと人間関係ができました。

— そこからOKAY STUDIOとしての活動が始まったということですね。

卒業後もOKAY STUDIOとして仲間と一緒にいられる状況が生まれたのは、すごくラッキーでした。毎日、スタジオに集まって、仕事や、興味のあることや、その他のいろんなことについて話していました。そんなぜいたくな環境はありません。私にとってOKAY STUDIOは、友人、ハードな作業、たくさんの時間、混沌、寒いスタジオ、いいエネルギー、トライすること……。今も、各自がそれぞれに活動するためのプラットフォームであり続けています。

— スペイン、アメリカ、イタリア、ロンドンなど、あなたは多くの国に住んできました。その経験はデザインに反映されていますか？

ピンポイントで影響を挙げることはできませんが、知らない場所へ行くのは人の生き方や振る舞いを観察するのに最もいい機会であり、最高のインスピレーションの源です。旅をすると、必ず不快なことがありますよね。いつもの環境を離れて何かに出会った時、自分自身を含めて、人の反応やものの見方は実に多様で、しばしば即興的です。問題があって、手段が限られていると、人は創造的な解決を見つけるものです。

— あなたのデザインは、構造や制作のプロセスが一目で分かるものが多く、ビュアで優しい印象のものが多いと感じます。昨年、発表した「エイントゥリー」もそうでした。

私のデザインのアプローチは、物体としてのものへの興味と共に、ものが環境とかかわり合い、最終的に人によって使われることを出発点にしています。もの自体に美しさがあるとしても、それはシンプルさや純粋さと結びついて存在するのだと私は信じています。デザインは、スポットライトを求めめるものではなく、周囲と調和して存在するものなのです。

— リミテッドエディションのデザインのトレンドについて、どう思いますか？

トレンドという言葉がふさわしいとは思いません。大量生産の枠組みでは実現できない問題解決やアプローチをデザイナーが実験できる分野として、とても前向きに捉えています。

— デザイナーとしてのビジョンは何ですか。
個人的には、第一に、自分が楽しめることをしていきたい。そしてうまく行けば、私がデザインしたものが人が楽しめて、その人ともが一緒に歳を取っていきけるといいですね。あとは、私たちデザイナーの仕事が、今の世代よりも影響力を持っていくが望ましい。ものがあふれている現在は、社会の中でデザイナーとしての立場を意義あるものにするのは簡単ではありません。でも正しい方法でつくられたものには、やはり存在する権利があると思うのです。



馬具づくりの技術に応用し、革のストラップを使ってデザインされたリミテッドエディション作品「エイントゥリー」。手前中央はペーパーウェイト。2011年秋、ロンドンで開催された「ヴェラ・チャプター・ワン」展で発表された